



カントウータ

Cantuta

No. 30



サンタクルスの中央公園9月24日広場（撮影者 椿 秀洋）

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1. 追想 YUMI IN MEMORIAM 鈴木タ美子さん | あてねあ |
| 2. ボリビアの思い出 | 小笠原 博 |
| 3. 二度のヒアリ体験 | 渡邊 英樹 |
| 4. 中南米で人気ダントツ、ソニーの裏方・裏話 ... | 川原 康延 |

1.追想

YUMI IN MEMORIAM

鈴木夕美子さん



サラマンカ大学文化人類学博士

あてねあ



はじめに

筆者は夕美子さんのニットのファンのひとりに過ぎず、故人と特別の親交があったわけではない。とはいえ、彼女の存在感がたぐいまれなものであることは、常々感じていた。訃報を知ってから故人の軌跡の一部に触れ、あらためて、そのことを実感した。

このたび、夕美子さんのご令嬢、麻衣さんへのインタビューが実現し、夕美子さんのひとと生涯の一端を知ることができた。都下随一の進学校、立川高校から早稲田大学法学部を卒業した才媛であり、ニット・デザイナー、経営者にして歌手という多彩な経歴のいっぽう、家庭では子どもたちに勉強を教え、地道に学ぶことの大切さを教え諭す、厳しい母親でもあった。その厳しさが愛情ゆえのものであることは、たとえば、捨て犬や捨て猫を次々に連れ帰り、一時は大型犬4匹に猫5匹を抱える大家族になってしまったというエピソードからも、うかがえる。

多才であると同時に、なにごとにもストイックに、完璧主義ともいべき勤勉さをもって取り組んだ夕美子さんの生涯は、地に足の着いた、それゆえに輝かしいものだった。その魅力の一端を、みなさんと一緒に味わってみたい。

「謎のボリビア移住」とニットの仕事

鈴木夕美子さんは 1950 年 10 月 15 日、東京都小平市で、長野県上田市に本家のある鈴木家の、五人きょうだいの末子として誕生する。立川高校時代にはじめてラテン・ヴォーカリストとしての活動は、早稲田大学時代に本格化する。卒業後の 1978 年、28 歳のときになぜか単身、ボリビアに渡る。そこで出会った藤本敏彦氏と結婚し、ニットの製作販売を開始した。

糸の仕入れ、染色、デザインなど、制作のすべての工程が、手づくりだった。ラパス市から二千メートルほど標高を下り、豊かな植生をもつ熱帯ユンガス地方を訪れて多様な植物を採集。そのひとつひとつについて実験し、ニット糸の染色に適しているかどうかを確かめた。サン・フランシスコ教会の正面左の上り坂、サガルナガ通りに店舗を構え、作品を販売した。当時の屋号の **Artesanías TOSHY** は、藤本氏の名前に由来するのだろう。

ある日、ひとりの英国人が来店し、「もっとたくさん作ってくれませんか？ あなたのニットをたくさん買って、英国で販売したい」と持ちかけたことが、すべての発端だった。ラパス市内に染色工場を設置して、輸出向けのニット制作事業に着手。夕美子さんがデザインするニット作品が、ボリビアから世界へと、羽ばたきはじめてののだ。

そのデザインは、親しみやすく愛らしく、それでいて洗練された、夕美子さん独自のものだ。

セーター、カーディガン、帽子や手袋、バッグなど、ひとつひとつのフォームと柄が十分に練られている。ある作品と別の作品のデザインはまったく異なるのだが、どれもが夕美子さんの作品だと一目でわかる。日本的とか、ヨーロッパ調とか、アンデス風とかいった、既成のイメージでは形容できない、夕美子さん独自の世界の表現である。

こうして、夕美子さんがデザインし、糸を染めて制作したニットが、欧州や日本で、たくさんの女性を暖かくつつみ、そのひとの個性の一部となったのだ。とはいえ、夕美子さんの最大の関心事は、現地ボリビアの女性たち、とりわけ「チョリータ」と呼ばれる先住民系の女性たちの手に職をもたせ、その経済的自立を支援することだったという。



写真上： エル・アルト市の工場に集合した従業員

Diseños Yumi

ニットの仕事が最高潮に達するのは、夕美子さんが 20 年の結婚生活に終止符をうち、自らのブランド Diseños Yumi を立ち上げてからだ。エル・アルト市の広大な敷地に工場を移し、染色部門からボタンつけなどの仕上げ部門、製品チェック部門までのシステムを確立し、200 人の従業員を擁するブランドに、発展を遂げたのだ。従業員の多くは、ニットを編む女性たちである。彼女らは、工場ではデザインの説明を受け、素材の糸を受け取ると、それを持ち帰って編み、できあがったニットを工場に持って行って工賃を受け取る。工場では、仕上げと製品チェックのプロセスを経て、ニット作品として完成させるのだ。

たくさんの作品のデザインだけでも、大変な作業であることは想像に難くない。夕美子さんはそれに加え、国内外から素材（羊毛、アルパカ毛、コットン、リネン、シルクなど）を入手し、これを染色し、従業員に編み方を指導し、各国からのバイヤーに販売し、輸出するという、すべての工程を統率、管理していたのだ。

社会貢献

そしてその事業の根幹には常に、「女性たちに仕事を与えたい」という願いがあった。さらに、従業員の子供らに奨学金を与え、英語学校での勉強を支援していたそうだ。それらの「夕美子奨学生」のなかには、英語圏に渡って就職したケースもあるという。このような草の根の、ひそやかな支援活動を、夕美子さんは誇りに思っていたそうだ。

国際協力をうたう事業や団体は数多く、とりわけボリビアには、各国の協力機関が集結している。その多くは公的な資金によるものだろう。夕美子さんのように、ひとりの人間が、自らの才能と努力によって、ここまでの現地社会への貢献を果たせるケースは稀というよりむしろ、これもまた夕美子さんにしかできない、たぐいまれな活動だったと言えるだろう。

いつも糸を扱っていた夕美子さんは、長年、呼吸とともに糸を吸い込んだことから、職業病ともいべき肺線維症を患う。さらに、不整脈の持病もあった。症状が悪化して事業の継続が困難になった二年前、夕美子さんは工場を売却し、その売却益を、すべての従業員に分配した。



Yumi デザインのサイト

<http://www.yumikosuzuki.com/home.html>

ブルーベリーズ・カフェ

Yumi ブランド・ニットの仕事に加え、夕美子さんは 2006 年、アバロア広場の向かいの一軒家を買取り、ブルーベリーズ・カフェを立ち上げる。麻衣さんによれば、夕美子さんは、外食するとお腹をこわしがちだから（筆者も同様なので、わかります）、安心して飲食できるものを提供できるよう、また、自分の好きな料理や飲み物を出し、自分の好きな内装の空間づくりなど、楽しいことをやりたい、ということで、このお店をはじめたそうだ。カフェの隣には、Diseños Yumi の二号店もオープンした。

ラパス市では他に類をみないような、親しみやすくかつ洗練された内装と、厳選された豆を挽いたコーヒー。照り焼きチキンやカレーライスといった和食風メニューは、夕美子さんのレシピだ。ボリビアではここにしかないコーヒーゼリーなどのデザートは、高田馬場の製菓専門学校で学んだ麻衣さんのお手製だった。味付けから盛り付けまで手をかけた、きめ細かなサービスは、日本の店を彷彿させる。エントランスには緑あふれるテラス席が、最奥には静謐な風情のある庭がひろがる。心安らぐ空間は、とりわけ外国人の間で評判を呼んでいるようで、じじつ、待ち合わせの際には、たいていここを指定される。

なにごとに徹底的に極める努力家だった夕美子さんは、料理も完璧だったそうだ。4 年ほど前から、ご令息の朋（とも）さんがブルーベリーズ・カフェのイニシアティブをとって経営にあたり、厨房にも立つ。FaceBook をみると、最近はキヌアの料理やシナモンロールもお目見えしているようだ。新たな試みのいっぽうで、夕美子さんのこだわりのメニューも、しっかりと継承されている。

ラテン・ヴォーカルの活動

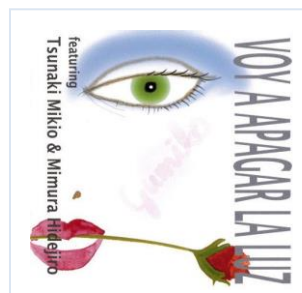
ブルーベリーズ・カフェを会場に、夕美子さんは念願のライブ演奏活動を再開、歌手として再出発した。しかし、ボリビア人との演奏はいまひとつ物足りず、2011 年、30 年ぶりに日本で、昔の音楽仲間らとのトリオを再開したそうだ。



ブルーベリーズ・
カフェ



この年と 2013 年に、相次いで CD を発売する。彼女の音楽活動の映像（YouTube）のなかでは、とりわけ「グラシアス・ア・ラ・ビーダ」が印象的だ。歌唱の前の「長い話」には、自殺した作曲者、ビオレータ・パラをめぐるエピソードの他、「Vida は日本語では 2 つの言葉。人生と命」と、ビーダが二つの意味を併せ持つ、という示唆に富む指摘もある。<https://www.youtube.com/watch?v=ptbQEYXN29E>



ファーストアルバム
VOY A APAGAR LA LUZ
～灯りを消して(2011)



セカンドアルバム
LA PUERTA～扉(2013)

勉強

ニットの制作、カフェの経営、歌手としての活動、そして子育て。どれひとつとっても大変な仕事のそれぞれを、完璧にこなしていた夕美子さんは、多彩な才能を活かすための努力を怠らなかったという。

勉強好きで、とりわけニットの輸出に必要な語学については、スペイン語の他、英語とフランス語を、またボサノバを歌うためにポルトガル語も熱心に学び、習得されたという。教育熱心でもあったため、麻衣さんは、「子どものころ遊んだという記憶がない」と述懐する。学校から帰ると、ミシンに向かう母親の横で、算数、国語、漢字を教わる毎日だったそうだ。そのおかげで、麻衣さんは日本滞在時にもなんら不自由のない日本語を身につけ、今回のインタビューも、すべて日本語で行った。彼女はさらに、流ちょうな英語も操る。

「勉強しなさい」が口癖だったという夕美子さんが、子どもを自らの仕事や活動に巻き込むことは、決してなかったそうだ。「わたしはわたしの事をやるから、あなたは自分のことをやりなさい」と、むしろ独立した個人としての自立をうながした。個人の独立、自立を重視する考え方に、筆者は全面的に賛同するが、家族中心主義が根強いボリビア社会でそれを貫くのは、さぞかし大変だったろうと想像する。

夕美子さんの多彩な活動のどの側面にも、常に自らの信念に沿って、ストイックなまでに勤勉に、徹底的にものごとを追求していく姿勢が、はっきりと見て取れる。その姿勢をもって、日系人とか移住者といった概念を超えた、コスモポリタンでクリエイティブな表現者、アーティストとして、また実業家として、さらには国際協力の実践家として、じつに幅ひろく、それでいて着実な活動を展開されたのだ。



夕美子さんをめぐる雑感

最後に、筆者が垣間見た、在りし日の夕美子さんの印象を、雑感を交えて綴ってみたい。

もうふた昔以上も前のことだ。Artesanías TOSHY店の近くのサガルナガ通りで何度か、夕美子さんをお見かけしたことがある。当時からみごとな銀髪の前髪を目の上で切りそろえ、個性的なファッションに身を包み、さっそうと歩いている姿は魅力的だった。

上記の YouTube の「長い話」には、昔レストラン・ナイラで、観光ビザで「不法就労」していたというくだりがある。サガルナガ通りにあったこのレストランは、手ごろな価格で洗練された料理を出すのみならず、分厚い白塗りの壁にコロニアル・スタイルの窓、木材を多用した落ち着いた内装や、素焼きの食器も魅力的だった。そのどこかに、かつてここで働いていた夕美子さんのセンスが活かされていたのかもしれない。

このお店のお昼定食は、前菜、スープ、メインディッシュに手の込んだデザート、カップに入れたコカの葉に熱湯を注ぐスタイルのコカ茶までついて、わずか 10 ボリビアーノス（約 15 米ドル）の時代が長く続いた。そのおかげもあって、わたしもときどき足を運び、おいしい料理と独特の雰囲気を楽しめた。

グルメブームで、シェフ養成校が乱立し、凝った内装の飲食店が生まれては消え、値段だけは天井知らずに高騰している昨今のボリビアで、レストラン・ナイラほどのレベルの料理を出す飲食店は、稀なのではなかろうか。

「ボリビア・folklore のメッカ」とされていたペーニャ・ナイラが 1996 年におよそ 30 年の歴史の幕を閉じ、やがて、その隣にあったレストラン・ナイラもついに扉を閉めた。オーナーはフランス人だったが、彼の指導を受けたシェフはボリビア人で、数十年の間、一度も変わらなかったという話だ。調理師に限らず、矜持と気概をもって仕事にとりくみ、低価格で質の良いサービスを提供する優秀な職人が引退し、拝金主義で放縦な

若者にとって代わられつつあることを、実感させられることが少なくない。

Yumi の閉店後、ニットを求めてサガルナガ通りの店をまわったところ、ある店の女主人が言った。「わたしも昔は工房を持っていた、手編みのニットをつくっていたけど、肩は凝るし疲れるのに儲からないから、当時の職人たちも皆、手編みは止めちゃったの」。こうして「古き良きボリビア」が、徐々に姿を消していく。

2006 年、はじめての先住民系大統領による現政権が生まれると、資源の国有化がすすみ、立体交差、ロープウェーなどのインフラ整備が加速、不動産バブルやグルメブームも顕著になった。日本でもスペインでも、バブル経済期には、なにやら社会全体が熱に浮かされたような、妙なテンションになったように思う。この 10 年ほどのボリビアも、同様の感がある。

さて、TOSHY から Yumi にニット店の屋号が変わった後の藤本氏は、ウユニ塩湖ツアーを舞台に活躍している模様だ。かつてウユニ塩湖は、乾季限定の観光地だった。雨季には道がぬかるみ、アクセスできなかったのだ。しかし近年、空港が整備されたこともあり、ウユニ塩湖の観光シーンが大きく転換した。雨季に塩湖にたまった水が鏡面の効果を生み、独特の景観が得られることが、観光ポイントとなったのだ。とりわけ、星空を映せば、宇宙空間にいるような感覚が味わえるようだ。こういうアイデアをビジネスチャンスにつなげる、すごい才能のひとがいるんだなあ、と感心していたのだが、それは藤本氏の発案だそうだ。

麻衣さんも多才なひとで、パティシエールであると同時に、ロッククライマーでもある。救命救急の技術を持ったツアーガイドとしての活動では、父上である藤本氏と仕事をすることもあるようだ。

麻衣さんの事務所が夕美子さん宅に併設された時期に、何度かお邪魔する機会があった。お宅の内装や調度品にも、夕美子さん独自の世界が展開されていた。彼女のニットと同じスタイルだな、と感じた。Yumi ニット店にはバーゲンセールがあ

って、そのおかげで、いくつかの Yumi ブランド・ニットを手にすることができた。よく練られたデザイン、高品質な糸、目の積んだしっかりした手編み、ボリビアではそれまで見かけなかった、商品のタグや包装など細部にまで、夕美子さんの配慮が行き届いていることが、見て取れた。

今年 7 月、久しぶりにニットを買おうとサガルナガの店を訪ねたら、Yumi はすでに閉店し、別の店になっていた。あわててソポカチ店（ブルーベリーズ・カフェの隣）を訪ねたら、こちらも閉まっている。やがて、夕美子さんが亡くなったことを知った。故人についての情報を求めてインターネットで検索すると、彼女のブログ「すずきゆみが贈る ボサノバとボレロの名曲 <http://suzuki-yumiko.jugem.jp/>」に出会った。

ブログの内容のほとんどは、日本でのライブ公演の案内で、柔らかく素朴な筆致が印象的だ。そのなかに、「ペルーの毛糸会社に注文した毛糸を運んでくる大型トラックがペルー側で横転し積み荷のほとんどが盗まれてしまうという事件」への言及がある（2011.10.24）。ペルーからもニットの素材を輸入していたことがわかる。ブログのこの部分は、1993 年ごろに「200 キロ離れた地方都市にある事務所に向かって運転中、私を追い越したオレンジを満載したトラックが少し先で横転」という思い出につながっていく。積み荷のオレンジがこぼれて道路を覆うと、後続車が次々に車を止め、「いちご狩りのノリ」でオレンジを拾い集めては、ひとつ残らず持ち帰ってしまったというエピソードが、楽しげに綴られている。

麻衣さんによれば、この思い出は、オルーロに事務所を開設したときのことだそうだ。夕美子さんは当時、ラパス市での経験を活かし、オルーロの先住民系の女性たちにも仕事を与えるべく、奮闘していた。残念ながらこの試みはうまくいかず断念することになるが、毎週金曜日に自ら長距離を運転してオルーロの事務所に通うことを、一年間続けたのだ。驚くべきバイタリティである。

夕美子さんがボリビアに渡ったのは 1978 年。バンセル軍事政権の時代である。その後のクーデター、財政破綻とハイパーインフレにはじまり、40 年間にはこの国の激動の時代と社会のさまざまな局面を体験されたはずだ。とりわけ、労働者の権利意識の強いボリビアでの会社経営の大変さは、想像に難くない。

数々の困難を克服しながら、文字通り八面六臂の活躍を繰り広げる中で、夕美子さんには、自らの健康を顧みる余裕がなかったようだ。肺結核に罹患したことに気づかず、肺線維症が悪化するなどの不運もあった。

昨年、日本で入院したものの、「ボリビアにやり残したことがある」と周囲の反対を振り切って 10 月にはボリビアに戻り、酸素吸入をしながら、今年 3 月 2 日に亡くなる前夜まで仕事の整理に取り組んでいたという。せめてもう少し、ご自分の身体を大事にしてくれていたなら、もっと長く活躍してもらえたのではないだろうか。

とはいえ、夕美子さんの 66 年は、ふつうのひとの数百年分に相当するかもしれない。才媛であり、厳しい母親であることに加え、デザイナーとしての才能を発揮し、それをビジネスとして成功させると同時に先住民系の女性たちの経済的自立を支援。最高級のニットは、バーゲン価格によって低所得者層にもアクセスできるよう配慮。お腹にやさしく心地よい空間、ブルーベリーズ・カフェを

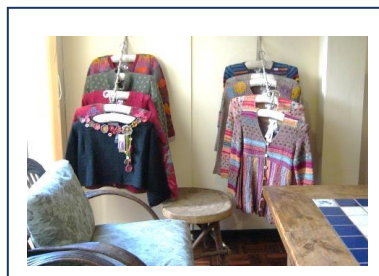
プロデュースし、ラテン・ヴォーカリストとしての活動では 61 歳で CD デビュー。捨て犬や捨て猫をひきとって育て、若者には奨学金を給付して勉学を支援…。日本とボリビアでの活動が中心だったにしても、そのニットはさまざまな国に届けられ、世界中で愛されている。真のコスモポリタンであり、在野のアーティストとして、だれよりも彩り豊かな人生を生き抜いたといえるだろう。

夕美子さんの活動のうち、ニット作品を展示するギャラリーが、ブルーベリーズ・カフェの二階、外階段を上がったフロアに設置されている（月～金の 9 時から 17 時まで）。彼女の作品と軌跡は、これから多くのひとに、たくさんの刺激と励ましを与えてくれるに違いない。

拙稿を閉じるにあたり、夕美子さんのひとと生涯の一端を教えてくださいました鈴木麻衣さんに、心からの謝意を表明したい。夕美子さんは表に出ることを嫌ったという。このような追想文を公にして良いかどうかを故人に尋ねれば、ダメだということに決まっているとのこと。迷った末に「母のことを知りたいひとにもいるはずだから」と、インタビューの申し込みと文章の公表に、ゴーサインを出してもらえた。麻衣さんへの二度のインタビューの中で、貴重なエピソードの数々に触れることができた他、かつての工場の職員への取材も、有益だった（2017 年 9 月）。拙稿が、「夕美子さんを知る」ことの小さなきっかけになれば、幸いである。



**Yumi 作品
ギャラリー
から**



2. ボリビアの思い出

(コロニア オキナワを中心に)

社会医療法人 南部病院

小笠原 博

私は大分、昔の事になりますが、1968年から約3年間、コロニア オキナワ スメロドスの診療所に赴任しました。出発前、JICA（当時は海外移住事業団）の本部で、担当者から現地の医療環境について説明を受けました。どの程度の医療機器がそろっているのですかと質問したところ「第Ⅱコロニアは、米国から提供された発電機、レントゲン機械もあり、又、日本からもいろいろ送ってあるので盲腸程度の手術が出来る道具はそろっていますよ」との答えでした。その位あれば何とかなるだろうと安易な気持ちで出発したものでした。当時、サンファン診療所に赴任される産婦人科医の故 松本祐太郎先生と一緒の飛行機になり、又、この出会いが後にオキナワ移住地での診療にとっても助かる結果となりました。

羽田→ホノルル→マイアミ→メキシコ→リマを経由、ここで飛行機を乗り換え（ペルーでは案内が総てスペイン語の為、もう少しで乗り遅れるところでした）、ボリビアの首都ラパスに到着、36時間余りかかりました。



写真2-1 当時の空港からラパスを見下ろす。
中央に「イリマニ山」6,457m

4,711m、高度世界一のラパス空港に降り立った後、日本出発前から聞かされていた空気の薄さが時間と共に感じられ、大きく深呼吸しようにも何か胸

郭の拡張が不十分な感じで肺内に残った炭酸ガスが不快感をおこさせ、その晩、疲れているにもかかわらず充分眠った感じがありませんでした。

翌日、夕方、サンタクルス行きのプロペラ機に乗り込みやっと深呼吸ができるまで、この酸欠状態は続いていました。

飛ぶこと3時間、夕闇がすっかり濃くなったサンタクルス空港に降り立った時、猛烈な暑さに包まれ、ああこれが南米の夏なのかと思い知らされました。

出迎えてくれたサンタクルス支部職員に車に乗せられ、この町第1と云われるホテルサンタクルスで、これから歓迎会との事でした。

駐サンタクルスN領事、事業団S支部長、職員等多数集まり、まず、S支部長が立ち上がり、「着任された両ドクターを迎えて乾杯をする、サルーツ」と耳を聳せんばかりの大声を出し、それに和して全員がまた天に届くかと思われる叫び声で「サルーツ」。いやはや、サルーツの意味も分からず何事が起こったのかと驚かされました。

前に座っている職員に「サルーツ」ってどう言う意味と聞いたところ、それはスペイン語の Salud にして、健康と云う事、挨拶の言葉としても用いると教えてもらいました。正直、長旅の上、酸欠が続き疲れており、とても「サルーツ」の状態ではなかったのですが、せっかく集まってもらったので目をこすりながら、歓迎を受けました。

その晩、サンタクルスのホテルで一泊した後、事業団のオンボロジープに乗り、2時間余りでコロニアオキナワ第Ⅱ診療所に辿り着きました。

～赴任地の医療環境～

診療所（以後、病院と記しますが、1年後よりコロニアオキナワ中央病院と改めましたので）の入り口には中学生位の女の子が3人と、黄色くなった白衣を着た年老いた人が出迎えてくれました。

あとで分かりましたが、女の子は見習いの看護婦さんで、もう一人は前任のドクターでした。病院にはお金がなく、看護婦に白衣を買う事も出来なかったそうです。

翌日、病院内を見て回りましたところ、広さは30人位入院出来る程のスペースはありましたが、患者はゼロ、病室はクモの巣がはり、コウモリの絶好の遊び場となっており、建物の周囲には雑草(背の高さよりはるかに高い)が生い茂り、無数の蚊の大群が住み着いていました。

院内の設備を見ましたところ、医療行為が出来る器具といえば、注射器、血圧計位のもので、レントゲン機械、心電図はありましたが、何しろ数年前から発電機が故障の為、ホコリとクモの巣に埋もれた状態でした。これは大変なところに来てしまった・・・。3日3晩いかがしたのかと考えましたが、来てしまったからには仕方がない、出来る事から始めようと開き直ったものです。

まず職員全員を集め(運転手を含め5人しかいませんでしたが)、病院周囲の雑草と雑木林の伐採から始めました。100m四方の敷地を約2週間かけてきれいにし、牧場と同じように敷地周囲にクイを打ち、鉄条網を張り巡らせました。これは、牛や馬が敷地内に入り、フン等をして汚れるのを防ぐ目的でした。

次にいつも薄暗い院内(レンガ造りの建物)を明るくする目的で、レンガを砕いて、あちらこちらに窓を作り、ガラスを入れ、光が沢山入るようにしたところ、コウモリを追い出す事が出来ました。その後院内に白いペンキを塗り、何とか病院らしいかたちになったものです。ここに来て3ヶ月間、医者らしい事はほとんどせず、土方と現場監督業をやる事になってしまいました。

当初は患者が来たらまず診て、この病院にある薬で治りそうなのか、あるいは100km離れた町、サンタクルスの病院へ送るかを見分けるだけに医者が存在している状態でした。そこで、JICAのサンタクルス支部長にかけあい、赴任3ヶ月後、医療機器購入資金をひねり出してもらい、約1000km離れたボリビアの首都、ラパスに出かけ、何とか虫垂炎の手術が出来るものが整いました。又、同時に病院の改修等をお願いし、それまで使い物にならなかった手術場、トイレ、水道等の改修をJICAの工事班にやってもら

い、少しずつ病院らしい感じが出てきました。医師が医者としてとりあえずの医療行為が出来るまでに4～5ヶ月かかりました。

残念ながらボリビアでの全ての手術件数等の統計は残っていませんが当時 JICA に報告したものがありましたので書き出してみます。

手術症例数 (1969年2月1日～10月末日まで)

総数45件 ・虫垂炎 29例 ・帝王切開 1例
・卵管結紮 7例 ・脱肛 3例
・ヘルニア 2例 ・その他 3例



写真2-1 現地での手術風景。38度を超えるものすごい暑さの中でおこなわれる(左…篤Dr. 右…筆者)

この中には、サンファン診療所の松本 Dr. にお手伝いいただいた症例も含まれます。

症例数は多くありませんが、水道も満足に水が出ない為、手はアルコール入りの洗面器に漬けて消毒、皮膚や腸を縫う糸は絹糸ではなく、洋服屋さんで売っている木綿糸を使用。ライトは自家発電機を使用するも、手術中つかなくなった事も度々で、常に懐中電灯を10本位用意しておくのが普通でした。日本では考えられない環境でしたが、幸いと言えるかどうか分かりませんが、術後感染は1例も出ませんでした。

こんなところで無理して手術するのはおかしいと思われませんが、私が赴任してから3ヶ月の間に卵巣のう腫、腸閉塞症等3例をサンタクルスの病院に送りましたが、いずれも死亡。又、現地の病院は私共の病院の10倍以上の医療費がかかる等、移住者がとても払えるお金ではない等の理由で、何とかこの病院で手術をしなければ、という厳し

い状況下にあった事をご理解いただければと思います。

当時のボリビアは文盲率が 30%とも 50%ともいわれ、中学校を卒業すればエリートと言われておりました。ですからこの時代、日本の医療レベルと比較するのには無理があったのです。

私が高校生の頃、親から“若い頃の苦労は金払ってもいいからいくらでもしておけ”とよく言われたものですが、着任当初は“とんでもない所に来ってしまった”…が実感でした。しかし住めば都とよく言ったもので、現地の人も仲良くなるなどして住み心地もよく、2年間の約束でしたが、後任の都合もあり1年間延長することになりました。

在任中、外科系の松本祐太郎 Dr.、篤進 Dr. と共に手術、診療等で助けていただいたのは、私にとってとてもラッキーな出会いでした。

あれこれ苦労話みたいな事を書きましたが、この経験が私の人生に大いにプラスになったものです。

最後、現地の病院を離れる時、授業中の子供達と先生が“ドクトルが日本に帰るところだ”と授業を中断し、道路まで走って来て見送ってくれたことは、とても嬉しく思い、今でも忘れられない光景です。



写真2-3 帰国時、授業を中断して生徒や先生が見送ってくれた時の光景

3. ☆二度のヒアリ体験☆

西脇商事 代表

渡邊 英樹

南米産の蟻ヒアリが、最近、ニュースの新しい話題として登場するようになりました。

3〜40年前には、ボリビアのサンタクルス市の近郊へ車を走らせると痩せた土地の草地のいたるところでヒアリの蟻塚が見られその近くの木の枝には、小枝を組んだ直径7〜80センチはあろうかという大きな鳥の巣があつたりして、私には懐かしいボリビアの風景のひとつになっています。



写真3-1 ヒアリ（火アリ）

とは言うものの、実は、二度もヒアリに刺された経験があるのです。「刺された」というより、「かじられ且つ刺された！」というのが正解かもしれません。

牧場ばかりでなく、市内のほとんどが舗装されていなかった1970年代は、街中の空き地でも細長い隊列を成して移動しているヒアリが散見された時代です。

それは、中心地の住宅から、近郊の牧場を宅地開発した住宅に引っ越した時に起こりました。夕方帰宅して駐車場に車を入れようとして、車を降りた途端に、右足の脛の辺りに強烈な痛みを数ヶ所に感じました。

「痛っ、痛ったった！」と叫んでヘッドライトの下で見るとヒアリが数匹這い上がっていました！

3ミリ程度の巾の長いヒアリの隊列の上に脚を降ろしてしまったのです。

慌てて、払い落として家に入った途端、強烈なジ

ンマシンが襲ってきました！

顔が腫れ、身体中が赤く腫れ、刺された箇所はプツンと盛り上がり、その一番のトンガリは白い膿のようなものが溜まります。その辛さといったらありません。

冷水のシャワーを浴びたり、カルシウムが効くかも知れないとワダカルシウムの錠剤を気安めに飲んだりしましたが、簡単にはおさまりません。夜半を過ぎて、ようやく腫れが治まってきました。

もう1回は、原始林の中を夜中に車を走らせていた時に、用をたそうとして車を降りて道路脇に足を踏み入れた時にやられました。こんな数ミリのアリがよくもこんな痛さをもたらすな！と驚かされます。

「火アリ」とも言うそうですが、正に火のつくような痛さです。

瞬間は本当に飛び上がるほど痛く、後から襲って来るジンマシンもじっとしていられないほど辛いです。子供がやられたら、親子共々眠れない夜を過ごすばかりででなく、体力のない人は死に至るであろうことは、体験した者の実感としてよく分かります。

どこを回しても同じニュースの繰り返しに日頃うんざりしている私ですが、このニュースだけは、いくら繰り返しても良いし、

各関係機関ばかりでなく、市民一丸となって上陸を阻止して、定着は絶対に許さないようにして欲しいと願うばかりです。

ニュースによって、ヒアリと言う言葉が日本中に定着したことを実感する時もあります。病院の初診の時には、問診表を渡されますが、そのアレルギー欄の食物アレルギーにはXをつけて、その他の欄にヒアリアレルギーと記入しても、以前は何の反応もありませんでしたが、最近、それを見た看護師さん等から「おおっー!! □」という反応があり、ひとしきり会話が弾むのを楽しんでもおります。怪我の功名とても言うのでしょうか？

4. 中南米で人気ダントツ、ソニーの裏方・裏話

元ソニー中南米販社 Executive Service Manager

元ソニー海外事業本部 Electronics / IT Engineer

川原 康廷(やすたか)

私は今年、会社をリタイヤしてボリビア・サンファンに帰る準備をしている62歳の年金生活者です。川原一族は私が6歳の時(1961年)にサンファンに移住しました。小学校は日本語教育で中学になるまでスペイン語はあまりできませんでした。サンタクルスのラサル高校に進学しましたが同級生は担任にYasutakaはスペイン語が分からないから大目に見てあげてください、とカバーしてくれたほどです。しかし、数学、物理、化学はボリビア人から見ればずば抜けて出来ていたようで、よく同級生に教えてあげたり、試験の時はカンニングもさせてあげたものです。その後、サンタクルスのレネモレノ大学の経済学部に進学しましたが、私が学びたかった電子工学科が無く、どうしても諦めきれませんでした。そんな折り、JICAの研修で日本のNECへ行けることになりました。しかし技能研修とは言えどもほとんど工場の工員程度で、OJTには程遠いレベルでした。おそらく受入側も経験が無かった為だと思います。これではダメだと思い、すぐに現、東京工科大学の電子工学科2部で勉学を始めました。そこで自分のレベルがボリビアではずば抜けていたはずが、日本では通用しないことを痛烈に思い知らされました。とにかく日本人に追いつこうと人一倍勉強し、なんとか卒業する事ができました。

私がソニーに入社したのは1978年、中南米のthe lost decadeの前で、販社は絶好調で、後で聞いた話ですが、とにかくスペイン語のバイリンガル技術者が欲しいと募集していたそうです。とても私の学歴では入社できないと思いつつトライしたところ幸運にも海外要員として採ってくれました。4年間の日本勤務後1982年に27歳で中南米地域の営業、ロジスティックス、アフターサービスのHeadquartersであったソニーパナマに赴任しました。総従業員700名規模の中南米一の大支店です。日本人駐在員は24名で私は5人目の技術者としてでした。

そこから孤軍奮闘が始まりました。翌年からブラジル、アルゼンチン、ボリビアをはじめに年率1000%を越える超インフレ不況が中南米を襲いました。多くの日本企業はマイアミや日本に逃げ去り、ソニーも御多分に洩れず、駐在員を1/3の8名に縮小し技術系は私一人にされました。地元の100名以上のサービススタッフの生活が29歳の私の双肩にかかってきたわけです。それだけではなくHeadquartersであるが故にラテンアメリカ全域のサービスネットの面倒も見なければなりません。すなわち5億人の市場で世界最先端技術企業、ソニーの技術系責任者にされたのです。とても新米社員に務まるはずがありません。しかし私は考えました。移民の子として弱音は吐かず、絶対に負けないことを会社で証明しようと決意しました。逆にここを乗り越えればソニーは市場を独占できると思いラテンアメリカのサービス網の改革に取り組みました。人材の育成、部品の破格的値段での供給、技術情報の完全開放。ソニーの品質は良いし、しかも故障してもどこでも修理できる体制を確立しました。営業にはとにかく売りまくってくれ、後は私が何とかするからと激励し続けました。インフレ時代にはお金は物に代えた方が良いのです。案の定、ソニーがその投資目的の商品になったわけです。会社はV字回復をどの企業より早く達成し、ユーザーにもソニーなら安心と好評をいただき、その評判は未だに続いています。

私はボリビアで父の経営するラジオ屋の丁稚をしていました。何が足りていないのか顧客の要望を見抜く術を自然に身に付けていたのでしょう。育てたエンジニアは十数名、これらのエンジニア通じて2000名以上の中南米中のテクニシャンに技術指導を実施しました。サービス網改革を行った国は12ヶ国。10年間をかけて盤石なアフターサービス体制、すなわち裏方市場を築き上げました。厳しい生活環境のなかで移民の子としてボリビアで育ったことに大いに感謝しています。

1990年、チリは17年ぶりにエイルウィン文民政権に移管することになりました。経済も好転しソニ

ーチリの売上げは倍々ゲームでありました。しかし、サービスが追いつけない状態で改革のため再び私が日本の本社から呼び戻されました。ボリビア人とは仲が悪いチリ人の役員はなぜボリビア出身の日系人を送り込むのだと言う顔で見えていましたが、ここでもボリビア日系人移住者の意地を掻き立てられました。

まったくのゼロからのスタートでした。エンジニア、テクニシャン、受付嬢、ロジスティック、120人のスタッフを1年間で雇用し、教育を行い、7億円をかけてサービスセンターを設立しました。エイルウィン大統領が日本に来日された時は本社で感謝の言葉を述べていただいたほどです。



写真4-1 このビルには最新建設技術が使われており地震国チリでも絶対に倒壊しません

このように中南米でソニーの人気の高いのは高品質とそれをサポートする裏方の存在があり、成功は一夜にして成らずであり、たゆまない努力の結果だと知っていただきたいのです。

その後はソニーメキシコのサービス経費削減の改善、ソニーアメリカで品質改善などに携わり16年間に渡りアメリカ大陸を駆け巡りました。

最後に移民の子の後輩に伝えたい事があります。我々の祖父、父のようなパイオニア精神を私たちも持っている事を自覚してほしいことです。人生には必ずチャンスが巡って来ます。その時をしっかりと掴まえて、全精力を注いで努力する事だと思います。

半世紀、60年以上前に子連れ中年夫婦が裸一貫でよくぞ日本の反対側に来たものぞと、心からその挑戦と努力を讃えたいと思います。

Millones de aplausos a los emigrantes Japon
eses de Bolivia

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100años de historia de
la inmigración japonesa en Bolivia
2 を原典として 2012 年までを追補
在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3
日本人ボリビア移住 100 周年誌
在庫 2 冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12
コロニア・オキナワ入植 50 周年記念誌
在庫 2 冊
- ④ 『拓け行く友好の懸け橋』 2005-12
サンファン日本人移住地入植 50 周年
記念誌 完売し現地にも在庫なし
- ⑤ 『ともに 50 年そして未来へ』 2006 - 12
サンタクルス中央日本人会 50 周年記念誌
在庫 1 冊
- ⑥ 『ラパス日本人会 90 年の記録 1922 - 2012』
2012-10 在庫 2 冊
- ⑦ 『ギェンターの冬』 2016・7
パラグアイのストロエスネル独裁政権時代を
描いた異色のミステリー政治小説
在庫多数
統一価格 ①-⑦とも 2500 円(税・送料込)
ご注文は下記の当協会までメールまたは電話で
お名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数を
ご連絡ください。
admin@nipponbolivia.org 042-673-3133
お支払は銀行振込でお願い致します
(口座番号、名義人は発送時ご連絡します)
読後のご感想をお寄せ下さい。

前号以降の主な出来事と今後の予定

- 8/3 ボリビア多民族国独立記念日
祝賀パーティ
- 8/11 森の音楽祭(津市美杉町)
- 8/13 ボリビアフェスティバル 2017
(本所吾妻橋・隅田公園)
- 9/16 サンファンの集い
(八王子市・労政会館)
- 9/24-10/13 専務理事ボリビア訪問
ラパス(日本文化祭参加)、コチャバンバ
(日本人会創立 4 周年記念祭参加)
オキナワ、サンファン、サンタクルス
- 10/23-25 第 58 回海外日系人大会
(東京・憲政記念館・JICA 市ヶ谷)
- 10/30 ラテンアメリカ婦人協会バザー
(東京・御成門・東京プリンスホテル)
- 12/1 当協会クリスマスイベント
(東京・日比谷・東京六甲クラブ)
- 編集後記** 会報 30 号をお届けします。
今回は、ボリビアでアルパカ製品製造業を
業を起業し、歌手としても活躍の後
本年 3 月に亡くなった異色の日本人
女性への追悼記、1960 年代のオキナ
ワ移住地での医師奮闘記、最近日本
でも発見され繁殖が懸念されている
ヒアリについての体験記、そして
ラテンアメリカ全体を股にかけて日
本製家電製品のアフターサービス網
を構築したサンファン移住地出身の
ビジネスマンの奮闘記、の 4 編です。
執筆者の方々へ厚く感謝致します。
編集委員 白川 光徳、細萱 恵子
杉浦 篤

Copyright© 2002-2017

一般社団法人日本ボリビア協会 Asociación Nippon Bolivia All Rights Reserved
(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの無断複製、転載、改変は禁止されています。)